



グローバル化する 養殖産業

～ノルウェー・チリにみる サーモン養殖の産業化～



株式会社 日本経済研究所 地域本部

部長 洞 靖 英

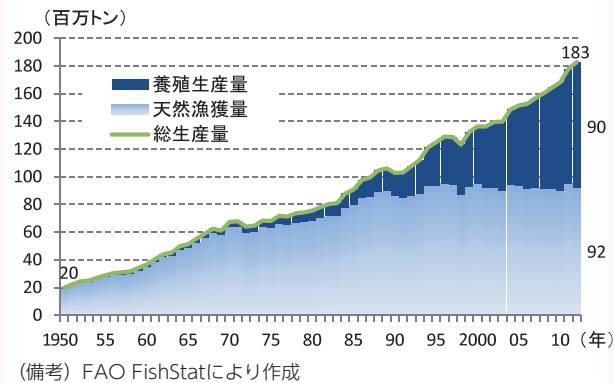
先進国における健康志向や途上国における食生活水準の向上により、世界の水産物消費量は増加の一途を辿っている。本稿では、世界で成長を続ける養殖業のうち、グローバルで産業化が進むサーモン養殖に焦点を当て、現状と方向性を提示する。

世界の水産物需要が拡大する中、供給量も増加の一途を辿っているが、資源制約のある天然漁獲量は増加が困難なことから、概ね横ばいで推移しており、相対的に資源制約が弱い養殖生産量の拡大が世界の需要増を支えている（図表1）。

三菱商事のノルウェー・サーモン養殖加工会社の大型買収案件（2014年11月11日三菱商事プレスリリース）などにみられる通り、我が国企業も積極的にグローバル化する養殖産業に参入している。世界の養殖産業の現状はどのようになっているのであろうか。本稿では、海面給餌養殖では最大の養殖魚種であり、グローバルな水産物取引の中で、重要なポジションを占めているサケ・サーモン（本稿ではサケ目サケ科の魚をサケ・サーモンと総称する）を事例に分析したい。

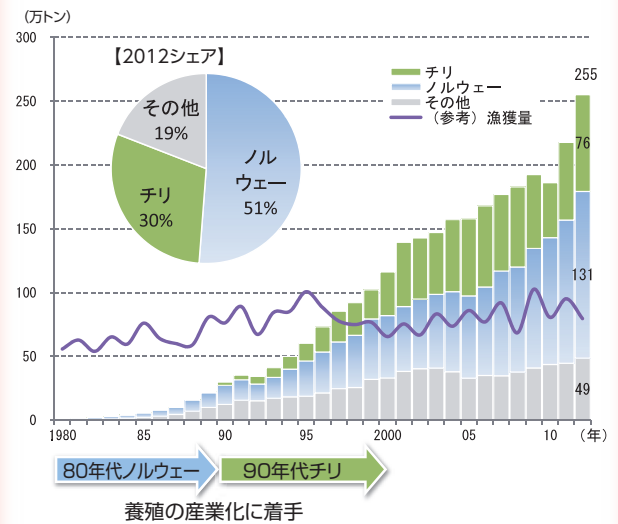
市場は縮小しているものの、市場全体は08年から13年にかけて約1.3倍に拡大している。一方、養殖サケ・サーモンの生産量は80年代以降急増しているが、これを可能にしたのが、ノルウェー・チリで産業化に成功した養殖の伸長であり、両国で世界の総生産量の約8割のシェアを占める（図表2）。

■図表1 世界の漁業・養殖生産量の推移



サケ・サーモン市場の8割超は、EU、北米、日本、ロシアの4地域で占められており、日本市

■図表2 養殖サケ・サーモン生産量の推移



(備考) 1. Kontali Analyse "Salmon World2009", "Salmon World2014" により作成
2. 養殖サケ・サーモンのうち海面養殖されているアトランティック・サーモン、トラウト、ギンザケの市場規模

ノルウェーとチリの海面養殖（海草類・貝類を除く）は、アトランティックサーモン、トラウトを中心としたサケ・サーモン養殖に特化している。世界の養殖サケ・サーモン生産量上位15社をみると、7社がノルウェー企業、6社がチリ企

業となっており、両国の企業が上位をほぼ独占する。特にノルウェー企業は、生産拠点をグローバルに展開しており、業界内での地位は高い。

ノルウェーでの養殖は、政府発行のライセンスが必要である。70年代にサケ・サーモン養殖業のライセンスが制度化された当初は、零細経営体を保護するために、ライセンスは地域住民に限定され、経営体の規模は小さく、生産性も低い状況であった。しかしながら、80年代以降、政府主導により養殖業の企業化・大規模化を推進した結果、ライセンス数及び1ライセンス当たりの生産量は大きく拡大し、サケ・サーモン養殖業の産業化が進展した。

2013年現在ノルウェーには、サケ・サーモン養殖を手掛ける企業が約100社存在し、発給されたライセンス数は1,000を越えているが、200超のライセンスを保有するMarine Harvest社を筆頭に、上位10社で全ライセンス数の66%を保有しており、上位企業の寡占化が進んでいる。

こうした企業は、政府による支援も受けながら、グローバルに販売を拡大している。ノルウェーにおける生産量の約8割、チリにおける生産量の約6割が輸出に向けられており、輸出の拡大が生産量の拡大とサケ・サーモン養殖の産業化を牽引している。

ノルウェーでは、実質的に国家が水産物のグローバルプロモーションを実施している。中心組織であるノルウェー水産物審議会（NSC）は91年に設立されており、現在海外12カ国に海外事務所を設置し、各国における国別・魚種別のマーケティング計画の立案・実施を担っているほか、毎年25カ国で500のマーケティングプロジェクトを実施しており、ノルウェー養殖業の産業化とグローバル化を推進する上で、大きな役割を担う。

今後の生産量を「養殖エリア」、「生産性」の観点から考えると、一定量の生産量増加はあるものの、既に生産適地の開発は概ね行われていること、環境対応による生産量制限や、増肉係数（魚体量1

単位の増加に必要な餌の量）でみた生産効率化は既に限界値に近い水準に達していると思われること、等から、生産量の増加幅はこれまでの急成長とは異なり、限定的なものに留まると予想される。

世界銀行レポート「Fish to 2030」(2013年12月)では、2030年の養殖量を約360万トン（12年比12.5%増加）と予測している一方、人口増加・経済成長に伴い、2030年までに世界の水産物需要は約3割増加すると予測されており、サケ・サーモンの需要も順調に増加することが見込まれることから、需要が供給の増加を上回って推移し、需給の観点からサケ・サーモンの価格は上昇していくことが見込まれる。

サケ・サーモン養殖産業を取り巻く環境を内部環境と外部環境に分けて整理すると、まず内部環境は、①ノルウェーもチリも寡占化が進行しており、飼代をはじめとするコストコントロールや新鋭の養殖、加工設備への投資負担等の側面から規模の経済が働く産業であることに加え、ノルウェーでのライセンス保有規制の緩和等の規制緩和策も勘案すれば、今後もこの寡占化の方向は変わらないものと思われる。外部環境で見れば、②供給サイドには、飼料価格の上昇というリスク要因はあるものの、③顧客サイドは需要の増加が見込まれる、④マグロは採算ベースでの完全養殖は難しく供給量を大きく増やすことは難しいなど、代替品の脅威は比較的少ないこと、⑤新たなライセンスを取得し新規参入することは難しい、と整理される。この①から⑤の環境に鑑みれば、既に参入済の企業にとって競争優位性の高い産業であるといえる。

このようにグローバルに寡占化が進行する成長産業であるがゆえに、我が国の商社や水産会社も事業買収も視野に積極的に参入している。また、企業活動に目を奪われがちではあるが、ノルウェーでは実質的に国家がサケ・サーモンを含め水産物のグローバルプロモーションを実施している点は、我が国が水産品をはじめ食品輸出の強化を図る上で示唆に富むであろう。